

ふるさとの風
平成二十九年 睦月

古文献にみる —山田産土八社 坂社—

平成二十八年秋 御神遷によせて

あらたまの年。
歳神を迎え、一年の幸運を祈ります。

日本がここに集まる初詣

山口誓子

伊勢神宮に初詣に訪れる人々は、北海道から九州・沖縄まで—。

この光景は今も変わることなく見られます。

そして、初詣に始まるお伊勢参りは、春夏秋冬一年中続くのです。

～伊勢に行きたい伊勢路が見たい せめて一生に一度でも～

お伊勢参りの旅は古くから日本人の憧れであった。

「伊勢参宮宮川の渡し」（歌川広重/画）は、江戸時代の文政の頃の宮川の渡し場の状況を描く。御蔭参りの旅人を迎えるために伊勢音頭を踊る人々、襖をする人、お札を首に巻いたおかげ犬など、渡し場の様々な様子や対岸の伊勢の町並みが描かれ、当時の賑わいをつたえている。

～お伊勢さんほど大社はないが、なぜに宮川橋がない～

明治になるまで橋がなかった宮川では、渡し船が利用されており非常な混雑をきたしたが、「大神宮の御馳走船」などといって船賃は無料で、昼夜の区別なく運行されていたようである。

伊勢参宮の人々は、宮川の上（柳）・下（桜）のいずれかの渡しを利用して山田の町に足を踏み入れ、そして念願の伊勢神宮に辿り着く事ができたのである。

宮川は、古くは度会の大川、度会川、豊宮川、あるいは斎の宮川とも称し、これは豊受大神宮の襖川であったことにも由来する。

宮川を境に外宮を擁する山田の町に入る。山田ヶ原と称したこの地方は、宮川の分流が幾筋も流れて堰や原野があった。

やまだのはら
山田原 豊受大神宮大宮地近傍の總称なり。往古、宮川の堤防全からざりし時、支流、数派に分れ、池沼林藪、虞々に交錯せる平原なりしかば、沼木の平尾とも、或は、山田の原ともいひき。中世より、人家稠密して、一都會を成すに至れり。 (『神都名勝誌 卷二』東吉貞)

水止野^{しとみの}（上社付近）・清野（今社付近）・前野（外宮前）・美野（箕野中松原神社付近）・坂野（坂社付近）などと呼ばれていた各土地に、土地名を付けた産土神を祀り山田産土八社（須原大社、^{うぶすな}上社、^{やまだうぶすな}今社、^{すはら}坂社・^{あこね}藤社、^{せぎ}世木神社、^{みの}箕曲中松原神社、^{あこね}菑社）と称した。山田産土八社はすべて御頭（獅子頭）がご神体で、各社では御頭神事が行われている。産土神とは、生れた土地の守り神をいい、近世以後、氏神・鎮守の神と同義になる。

神社は日本人の住むところ、生活の営まれるところには必ず存在した。一定の地域に定住して共同して開拓し、耕作に従事した農耕社会では、その共同体ごとに通の守神をまつた。そうした土地々々の地縁によって結ばれた地域共同体の守神^{うぶすな}を産土神という。また血縁によって結ばれた特定の氏族の守神^{うじがみ}を氏神という。（『神道の世界』 真弓常忠）

山田産土八社の一つ、坂社は伊勢市八日市場に鎮座する。坂野神社、坂村社、坂村殿、坂殿社などといわれていたが、後に坂社と称し、明治四年（1871）十一月に村社に列せられた。創祀年代は不明であるが、およそ千二百年前の奈良期末期に祀られた古祠と推察される。『宇治山田市史 下巻』には、次のように書かれている。

「當社の創祀時代は詳でないが〔明治十二年神社明細帳〕には「此社、地名ヲ以テ稱ス、南山連綿シテ往古ハ坂野ト云ヘル廣原也、後民家邑ヲナシ坂野邑ト云、今坂之世古ト稱ス、其民邑建置ノ古ヨリ奉祀スル所ニシテ、中古山田ヲ坂・須原・岩淵ノ三方ニ分ツ、其坂方地方ノ人民崇敬セシ産土神ト申傳候也」と記してある。此の地を坂野と稱した時代は確でないが、今の上社附近を^{しとみの}水止野、今社附近を清野、外宮前を前野、箕曲中松原社附近を美野と稱し、いづれも奈良朝時代よりその名を表して居るから〔太神宮諸雜事記〕此の坂野邑もほゞ其の時代には建設せられて居たものと推量せられ、而して水止野には志等美神社、清野に清野井庭神社、美野には美野社が奉祀せられ、いづれも九百年から千百年以前の古社とせられて居るから、坂野社も亦同じく其の時分に鎮祭せられて居たものかに考へらるゝ。」

祭神は天照大御神と素戔鳴尊の誓約で生まれた五男神（正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊、^{あめのほひのみこと}天之善卑能命、^{あまつひこねのみこと}天津日子根命、^{いくつひこねのみこと}活津日子根命、^{くまのくすびのみこと}熊野久須比命）と三女神（^{たぎりひめのみこと}多紀理比賣命、^{いちきしまひめのみこと}市寸島比賣命、^{たぎつひめのみこと}多紀津比賣命）の八柱神。

御神体については、諸説ある。『宇治山田市史 下巻』によれば、「祭神並に御神軀に就て〔小祠拾〕に「坂社坂ノ世古ニアリ、坂野村社・坂村社・坂村殿・坂殿社等ノ名アリ祭神ハ八王子、産土神八社ノ内ナリ、神体ハ八王子ナリトテ衣冠シ玉ヘル神像十体坐ス、各箱ニ入ル、按二十坐ハ素戔鳴尊、稻田姫、五男三女神ナルカ 寶殿南面、御垣・御門・拜殿・鳥居アリ、寶殿ノ下二扉一口アリ、御頭ヲ納ム。殿内ニ御頭ノ古物トイヘル物アリ、社地東西南北ニシテ老樹多シ、社頭ノ造替祭祀等ハ結衆ノ支配ナリ、結衆幸福・橋村・廣田・橋村・中西・中西・堤・綿屋等アリ。御棚ハ舊トハ坂野五太夫ト云フ者ナリ。其後坂野喜兵衛」とあるが、〔茶物語〕並に〔毎事問〕には神像を八體として居る、これが確説である。」とあり、衣冠姿の神像十体（八体）が御神体とされていることが理解できる。

祭祀は、七月七日の例祭と二月十一日の御頭神事がある。例祭の七月七日には、民謡踊りや行事が盛大に行われ、昔はにわか芝居がやってきたとも伝えられる。

御頭神事は二月十一日が本祭で御頭舞が行われる。前日十日の宵宮では、御頭を社務所に安置し、境内で火を焚き祭典が催される。

「御頭神事」は伊勢市のいくつかの神社の神体となっている「御頭」を氏子が擁し、氏子集団の家々ないしは辻々で刀舞いなどを行って厄災禍を祓いのけようとする神事である。

（『伊勢市の民俗』）

御頭神事の舞は、素戔鳴尊の八岐大蛇退治を七段の舞い（七越し）で模したもので、大蛇が奇稻田姫（くしなだひめ）を探して歩き回る一段目に始まり、大蛇が酒槽の酒を飲み酔う有様や素戔鳴尊が大蛇を退治する姿が舞われ、最後七段目では大蛇が神となって天上する姿が見事に表現される。境内での神事が終了後、御頭巡舞に向かい所定の場所で舞う。その後、希望者は御頭に頭を噛んでもらい無病息災を祈る。

坂社には獅子頭（大）二口、古獅子（大）一口、指定文化財の古獅子（中）一口、小型の古獅子（小）一口が保管されているが、実際に舞う御頭は、坂社の御頭と合祀された藤社の御頭二口である。市有形文化財に指定（昭和三十九年（1964）三月十九日）された獅子頭の制作年代については、『伊勢市史 第7巻 文化財編』にはこう書かれている。

「本体には紀年銘はないが、棧蓋造の納箱の側面に「慶長十三申年（一六〇八）」、その反対側に「坂 卯月吉日」と墨書されており、同時期のもつと見なしてよいだろう。明治二十八年（一八九五）には更に外箱が新調された。」

また、大型の獅子頭の内の一は、藤社が合祀の際（昭和二十年（1945）七月）に坂社に納まったもので、古来の八つ頭の内の一が坂社の所有となった。

明治以前の伊勢市の御頭神事について、『伊勢市史 第8巻 民俗編』には、「御頭神事は、正月十五日頃、あるいは二月十一日頃に、町内の氏子総代、あるいはトウヤと呼ばれる人々が主となり、各社で所蔵している獅子頭を御頭（おかしら）と呼んで崇め、迎え、神楽師によって舞わし、悪霊を祓う行事である。これは箕曲中松原神社・菫社・世木神社・須原大社・坂社（藤社合祀）・今社・上社・川端町・中須町・磯町・西豊浜町森区・西豊浜町上区・有滝町・村松町・東大淀町・上地町の一六か所（西豊浜町小川区でも行われていた）において行われている。伊勢（山田）の御頭神事の歴史は古く、室町時代から行われていたという。久志本常彰の『神民須知』に「山田郷々産土神社有、大社、藤社、菫社、坂村社、今村社、牛頭社、箕曲社、落獅子 此一座社地無、総テ八社也」と書かれており、当時産土八社は大社（須原大社）、藤社、菫社、坂社、今社、牛頭社（上社）、箕曲社と落獅子を入れて、産土八社といわれていたことが解る。

また、落獅子については、「八社の一つに上げられている落獅子は、『杉の落葉』『小祠拾』によると、山田以外で生まれ居住する人や旅の者など氏子以外の者のための御頭で、筋向橋の辺りの十王堂に普段預けて置き、筋向橋に出したという。」と書かれている。

江戸時代を通じて行われてきた御頭神事であるが、明治になり師職制の廃止等によって、大きく変化したことが窺われる。各神社では、氏子総代を中心にした新しい形の御頭神事を行うようになり、その中で山田の各地域で特徴をもった重要な神事として今もなお継承されている。

境内にある“曾祢”と刻まれた石は、昭和二年の拡張工事中に旧石垣の中から発見されたと伝えられ「曾祢の石」と呼ばれている。このことから「曾祢の石」はかつて「曾祢口」と称された場所に建てられていたと推測することができる。

坂社には藤社祭神を始めとする、^{ほんだわけのみこと} 菅田別尊、柿本人麿、菅原道真の四祭神が合祀されている。

—藤社—

外宮摂社度会国御神社の分社といわれ、元同社の鎮守である。

祭神は、^{ひこくにみ}彦国見、^{かきたけよつかのみこと}賀岐建與、^{あめのむらくものみこと}東命。天牟羅雲命の子孫の^{あめのひわけのみこと}天日別命の御子で度会氏の祖とされる。御神体は、黒石の靈石である。

かつては外宮神域内にあり、社の前に大きな藤の木があったので藤社と名付けられたと伝えられる。沿革について『宇治山田市史 下巻』には、次のように書かれている。

「明治四年十一月二日村社に列せられ、同六年六月、一志久保町・八日市場町の一部より産土神として社地設定・移轉奉祀の願を出して許可を得。同年九月二十日遷座あつた。併しこの時は神殿を作らず、御神體は黒石で石壇上に露座したものであつたが、同四十一年四月十五日、八日市場町無格社若宮八幡社を、同年八月十七日一志久保町無格社人麿社を、同四十二年二月十五日同稻荷社を合祀する許可を受け、同年三月二十三日合祀を行ひ。同四十三年九月十四日、神殿を作りて、各御神體を鎮座した。」

尚、藤社に合祀された各社の祭神は、若宮八幡社は^{ほんだわけのみこと}菅田別尊、人麿社は柿本人麿、稻荷社は^{うかのみたまのかみ}宇賀乃御魂神である。またこの稻荷社は、藤社境内社であった藤蔭稻荷社、火除稻荷社、福寿稻荷の三社を合祀している。

その後、昭和二十年、藤社は太平洋戦争の影響等による外宮宮域の整備のため坂社に合祀され、その際に御頭も坂社に納められ現在に至っている。尚、稻荷社については坂社境内社の坂之森稻荷に合祀されている。

その他の坂社の合祀社について『宇治山田市史 下巻』にはこう記載されている。

花魁天神社 元は下中之郷町字新屋敷に在つた。祭神は菅原道真。創祭年月はわからぬが寶永三年之を再祀し火災守護神と崇めたことだけはわかつて居る、〔明細帳〕(略)

八幡社 元は常磐町字清水世古に在つた。祭神は菅田別命。明治四年常磐町橋村家鎮守八幡社より分祀して同町表通の共有社としたものである。(略)

(※) 下中之郷町…現・宮町

坂社の境内社は、^{さかのもりいなりやしろ}坂之森稻荷社と^{いせかみさぎびすのやしろ}伊勢上座蛭子社の二社である。

—坂之森稻荷社—

祭神は宇賀之御魂神。明治四十一年より現在にかけて、合計八座の稻荷神（運神（大和）稻荷・振袖稻荷・福寿稻荷・

藤蔭稻荷・火除稻荷・重成稻荷・小杉稻荷・金吉稻荷）が合祀されている。

大和稻荷社 元は八日市場町字新屋敷に在つた。祭神は宇賀之御魂神。同町幸福大和と稱した家の鎮守神であつたのでこの稱がある。〔明細帳〕

振袖稻荷社 元は下中之郷町字新屋敷に在つた。祭神は宇賀乃御魂神。堤氏の地内の鎮守で、堤氏の檀所伊豫國より勸請したものと云ふ。〔小祠拾〕この稻荷が時々社の邊に現れ、振袖を着て舞ふとの傳説から振袖稻荷の稱があると云ふ。古老の談 (『宇治山田市史 下巻』)



稲荷大祭は十月一日に行われる。

山田産土八社の各神社には明治期に周辺地区から合祀された稲荷社が、新しい名称で境内社となっている例が多く坂社も同様といえる。

—伊勢上座蛭子社—

祭神は蛭子大神^{ひるこおおかみ}。八日市場の市場の守護神として奉祀された社である。元は八日市場町字市場にあったが、現在は坂社の北側に祀られている。かつて八日・五日・三日に開かれていた市は、上・中・下座とされ、八日市場は上座であったことから、上座蛭子社と称したとされる。創祀年代は明らかにではないが、市場が開かれるようになったと考えられる年代や蛭子大神御縁起画^{ごえんぎが}より判断して、鎌倉時代中期に奉祀されたと推測される。



元は八日市場町字市場に在つた。祭神は蛭子神。由緒は〔明治十二年神社明細帳〕に「此社中古以来。追日人家繁殖セシ頃ヨリ毎月八ノ日、市場ノ定日トス、此ヲ以テ八日市場ノ名アリ、然リ而シテ此神福神ト申傳フルヲ以テ、市場ノ神ニ奉ゼシナルベシ、尤山田市街ニ、上中下ノ三市ヲ開ク、其上タルヲ以テ上座恵毘須ト相傳候事」とし、〔伊齋舊蹟聞書〕には「八日市場、魚店ノ中ニ有ル夷社ハ、幸福大和ガ家ノ支配ニテ、正月ノ夷ノ札ヲ賣ルモ造替モ、彼家ニ掌リシニ、十年計以前ニ、八日市場町内ヘ譲リタリ。」とあるが、同書の頭註には、「夷社、幸福大和家ノ持分ニ非ズ、是ハ陰陽師中間、往古ヨリ持來ル証文アリ、毎年錢貳貫四百文、陰陽師中間ヘ遣ス」と記し、〔杉の落葉〕にも「此夷社、幸福家持分ニアラズ、天正年中、幸福家預リタル証文アリ、陰陽中間ノ夷ナリ、昔夷屋敷アリ、年貢ヲ取りタル証文アリ。又八日市町内ヘ古錢一メ文ニテ受ケサセタル証文アリ、運上錢ニメ四百文、毎年正月中旬ニ陰陽仲間ヘ取ルナリ」

(『宇治山田市史 下巻』)

諸祭礼は、初蛭子祭・蛭子受（一月八日）、獅子頭神事（二月十一日）、蛭子講記念祭（五月八日）、例祭（八月八日）である。

一月八日の蛭子受けは、古来十二月二十八日、年の終わりに新年の開運を祈り福を授かるために行われてきた神事である。

『小祠拾』に「毎年十二月廿八日暁に恵比寿受トシテ参詣多シ」とあり、十二月二十八日（年の終わりの市日）の明け方から行われ多くの人々が参詣していたことが解る。

『勢陽五鈴遺響』蛭子祠の項は、「同処ニアリ方俗上座ノ蛭子ト称ス毎歳十二月二十八日此社地ニシテ檜木ヲ骨ニ削リ紙ヲ張テ末広扇ノ形ヲ摸シタルヲ売ル方俗乞ヲ翌正月獅子頭神事ニ初穂物トス此扇ニ紙一折ヲ添テ供スルナリ所謂一束一本ト云ノ意ナリ夷扇子ト称ス古雅ナル形ニシテ甚麗ナル品ナリ」とあり、当日授与された夷扇子^{えびすおうぎ}のことに触れており、獅子頭の氏子巡舞に際して初穂物を御供えするために使用されていたことが窺われる。

また、蛭子大神御縁起画については、岩村一男氏が「伊勢上座蛭子社小史」（『伊勢郷土史草第47号』）で下記のように述べている。

「此の御縁起画は古来、伊勢上座蛭子社において蛭子受の当日授与されて来たものである。初版は何時の時代に彫られたものか詳かではないが刻調の素朴さ、図柄等から判断すれば鎌倉時代

(1185～1333) 当社創祀の時に遡るものと推察される。

画面中央向って右側は「蛭子大神」、その左側は「天照大神」、後列右側は「素盞鳴尊」、左側は「月讀尊」と拝察せられ、四柱の神、中央のまるいものは古代の神田、車田を表し、その下に鎌があり、田の上には米俵が山と積まれ、その間には山の幸(栗の実?)があり、蛭子大神の前の折敷には串柿と思われる果物が盛られ、大神は折敷に大綱を乗せて漁夫に授け、漁夫は一人が船を漕ぎ、一人は大綱と鰯を釣り揚げ、大漁を授かって喜んでいる処を表し、一枚の素朴な画によって、蛭子大神の御神格、五穀豊穰、大漁満足の蛭子信仰本来の姿を表現した誠に貴重なものである。(中略)

伊勢上座蛭子社の御縁起画は七福神信仰の影響を受けない古い時代の信仰形態をそのままに伝えたものである。



上座蛭子社左手前に蛙の姿をした石が祀られている。「福蛙石」と呼ばれているこの石は宮司の林家に古くから伝わっていた霊石で、宮司就任にあたり伊勢上座蛭子社に奉納されたものである。

明治四十二年、伊勢上座蛭子社は坂社に合祀されたが、その後昭和三年に境内社となった。

宮川を渡りて、は山しげ山の陰に至りて見れば、此面彼面の里道をひらきて、誠にひとみやこなり。こゝを山田ヶ原と申せば、實も杉の村立おくふかげなり。是則外宮なり。…

(『伊勢太神宮参詣記』坂十仏)

南北朝時代の康永元年(1342)、足利尊氏の侍医として知られる坂十仏が神宮に参詣した際に残した著名な『伊勢太神宮参詣記』の一部分である。その中で「山田原」を「ひとみやこ」と称しており、この頃には、外宮の周辺は都の如く賑わっていたことが窺われる。

また、山田を支配した自治組織である山田三方(坂方・岩渕方・須原方)は、中世末期に既に組織独自の印章を用いて、八日市場などにおける魚座や米座などの商人座の加入認証業務など、当該地域での商業行為などにも強い影響力があったことでも有名である。

宇治・山田は、庶民の社寺巡礼の流行によって生まれた伊勢神宮門前町である。なかでも、中世の当時、経済的・都市的に発展を遂げていたのは外宮前の山田であった。広大な都市域を有する山田は、「山田十二郷」と呼ばれた集合的宗教都市である。…八日市場(上市)は南北朝期から確認できる商業地域である。戦国初期には、相物座等の設置が確認でき(上座)、ちょうど、曾祢町(現・曾祢)の道と参宮道(現参宮街道は、八日市場と曾祢口から平行して存在していた旧御幸道を撤去・改修し道幅を広くしたもの)とが交差した辺りにはかつて上座夷社が鎮座し、その周囲には商人座が立ち並んでいた。町内には、江戸初期創業の小西万金丹薬店舗が現存し、山田三方年寄家に列する伊勢御師福嶋御塩焼大夫邸跡の石碑もあるなど往古の姿を忍ばせる遺構も多い。(『都市をつなぐ』より「見学会だより②山田」千枝大志)

伊勢神宮内宮は、平成二十八年御鎮座二千二十年を迎えた。
神宮の歴史はおよそ二千年前に遡る。

第十一代垂仁天皇の即位二十六年、天皇の御杖代の皇女倭姫命により天照大御神は宇治の五十鈴川のほとりに鎮座し、皇大神宮（内宮）が創建された。

一方、豊受大神宮（外宮）の創建は、皇大神宮に遅れることおよそ五百年。天照大御神の御饌都神として、豊受大御神が第二十一代雄略天皇の即位二十二年、山田原に鎮座された。豊受大御神は、食物の神としてだけでなく、次第に衣食住の生活全般に関わる産業の守護神として、広く信仰を集めるようになった。山田原は現在の伊勢市街地で、地元の人々の日常生活の場であり神域は憩いの場でもある。

山田産土八社は、地域の歴史と共に歩み“山田”の風土に根付いてきた社だといえるであろう。

伊勢神宮は二十年に一度、式年遷宮が執り行われる。
坂社もまた二十年ごとの御神遷によって、常若の祈りを永遠に受け継いでいる。

坂社の銀杏は、木の枝が一度下がり、そこから上を向いて伸びているのが特徴で
「坂銀杏」と呼ばれています。

明治の時代の祭礼の際に杭として逆さまに打ち込まれた木が、
そのまま根付いて生長した銀杏となったことが伝えられています。

「坂銀杏」の黄色く色づいた銀杏の葉で境内が埋め尽くされる頃、
新しいお宮が誕生しました。

御神遷（御遷座）平成二十八年十月二十二日（土）午後七時～午後八時

室町時代頃から、山田の玄関口、筋向橋から外宮までの間の約1キロメートルの辺りに、

参宮客を相手に市が立ち始めた。

八のつく日に市が開かれたので八日市場という地名が生まれ、

江戸時代になると、

参宮街道の発達とともに賑わいをみせ、やがて山田の町の中心となった。

山田産土八社・坂社は、

古の時代からこの地域の守り神として人々に崇敬されています。

【参考文献】

「伊勢市史 第2巻 中世編」 伊勢市／編 L243／イ／2

「伊勢市史 第3巻 近世編」 伊勢市／編 L243／イ／3

「伊勢市史 第8巻 民俗編」 伊勢市／編 L243／イ／8

「宇治山田市史 下巻」 宇治山田市役所／編 L243／ウ／2

「伊勢市の民俗」 伊勢市民俗調査会／編著 伊勢文化会議所 L380／イ

「伊勢郷土史草 第29号」 伊勢郷土会 L243／イ／29

「伊勢郷土史草 第40号」 伊勢郷土会 L243／イ／40

「伊勢郷土史草 第47号」 伊勢郷土会 L243／イ／47

「三重県神社誌」 三重県神社庁／編 三重県神社庁 L170／ミ

「お伊勢さんへの道」 伊勢志摩編集室／編 伊勢文化会議所 L294／オ

「神都名勝誌 巻一～巻三」 神宮司廳／編 皇學館大学 L243／シ／1

「勢陽五鈴遺響 5」 安岡親毅／著 倉田正邦／校訂 L290／ヤ／5

「神宮参拝記大成」(増補大神宮叢書12) 伊勢太神宮参詣記 吉川弘文館 L174／グ／12

「大日本地名辞書 第2巻」 吉田東伍／著 富山房 R291.03／ヨ／2

「神道の世界 神社と祭り」 真弓常忠／著 朱鷺書房 L170／マ

「中世都市研究 13 都市をつなぐ」 中世都市研究会／編集協力 新人物往来社 L210／チ／13

「常磐町史」 町史発行委員会／〔著〕 町史発行委員会 L243／ト

※坂社所蔵資料(坂社御祭神由緒、伊勢上座蛭子社参拝の葉 他)



曾祢の石



福蛙石